

## 中世アイスランド史学の新展開

1. 本特集の趣旨
2. 校訂の時代
3. 「自由国」から「人類学の島」へ
4. 近年の展開

小 澤 実

### 1. 本特集の趣旨

アイスランドは、地理的に見れば北大西洋と北海の狭間に浮かぶ、絶海の孤島である。2007年現在 30 万人に満たない人口と 10 万平方キロを少し超える程度の面積を持つこの島は、北大西洋中央海嶺の上に形成された地質学上極めて稀有な島であり、それゆえに、陸地のかかなりの部分をヴァトナヨークルに代表される氷河層で覆われる寒冷地でありながら——ただしメキシコ湾流の影響で、スカンディナヴィア本土よりは冬でもはるかに暖かい——、しばしば火山の噴火も経験してきた。日本とは 1956 年以来国交があるが、2001 年になってようやく両国に大使館が設けられた。

9 世紀の植民に始まる中世アイスランドの歴史は、現地アイスランド共和国にとっても、アイスランドをその文化圏域の一部とするスカンディナヴィア諸国にとっても、また EU によって一体化、そしてそれに付随する地域意識の顕在化が進みつつあるヨーロッパ諸国にとっても、特別な意味を持つ。というのも、このささやかな人口しか擁さない孤島は、俗語である古ノルド語によりエッダ、スカルド詩、サガ史料群、グラーガスという、中世ヨーロッパ世界全体の中でも屈指の文化遺産を創出し、伝承してきたからである。1944 年にデンマークからの独立を勝ち得たアイスランドは政治的にも文化的にも輝かしい黄金時代を、スカンディナヴィア諸国はキリスト教世界に参入して急速に変質しつつあったヴァイキング時代の記憶を、ヨーロッパ諸国は自らの文化的来歴にかかわるゲルマン文化の祖型を、この中世アイスランドに見る。それゆえに、中世アイスラン

ドはヨーロッパ中世研究の潮流の中でもある種特権的な地位を与えられ、他の地域史研究とは一線を画したヒストリオグラフィを形作ってきた。

本特集「中世アイスランド史学の新展開」では、2000 年以降に公刊された中世アイスランド史に関わる文献の連作書評という形式をとり、近年におけるアイスランド中世史研究の潮流の一端を紹介する。取り上げる研究の意義をいっそう明確にするためにも、まずは、19 世紀後半から現在に至るまでの中世アイスランド史研究の流れを、簡単にスケッチしておこう！

### 2. 校訂の時代

19 世紀後半から 20 世紀前半の中世アイスランド研究の顕著な特徴として、歴史学と文(献)学との境界の曖昧さを挙げることができる。これは中世アイスランド研究に限ったことではないが、この当時はまだ必ずしもテキストの校訂が進んでいたわけではなく、テキストから情報を抽出するためには直接写本にあたる必要があった。したがって、仮に歴史像に関心をもつ者であったとしても、古書体学のような文献学の知識は必須であった。しかしながら中世アイスランド研究における両者の分かちがたい関係は、そのような校訂作業の立ち遅れという、外的条件によってのみ成立したわけではない。いわゆる国王証書や年代記という、19 世紀ドイツ中世史学が依拠した史料類型を基幹史料として有しない中世アイスランドは、古ノルド語で書かれた「文学」テキストから社会の様相を再現しなければならないという条件もあったことは強調されてよい。本章では、散文で

あるサガ、韻文である詩エッダとスカルド詩、そして法史料の4つの史料類型をとりあげ、19世紀後半から20世紀にかけてのアイスランド研究の一端を垣間見たい。

### (1) サガ史料群

サガとは、古ノルド語で記録された散文史料の総称である。小さな作品も含めて現存するものを合わせれば数百にのぼるが、文学史における一般的な理解に従えば、「アイスランド人のサガ」、「王のサガ」、「司教サガ」、「古代のサガ」、「同時代のサガ」の5つに大別することができる<sup>2</sup>。「アイスランド人のサガ」とはヴァイキング時代のアイスランドで起こった出来事を記録したとされるサガ、「王のサガ」とは主としてノルウェー王の事績の記録、「司教サガ」とはアイスランドの2つの司教区の司教の事績の記録、「古代のサガ」とは歴史時代以前の英雄達の事績に関する物語、「同時代サガ」とはサガの作成者の同時代の出来事の記録である。それぞれ代表的なものを挙げるならば、『ニヤールのサガ』、『ヘイムスクリングラ』、『ヴォルスンガ・サガ』、『司教アルニのサガ』、『ストゥルルンガ・サガ』となる。

サガの校訂は比較的早い段階から北欧の各地で進められていたが、シリーズ化された体系的な計画は、ドイツの「古ノルド語サガ・ビブリオテーク Altnordische Saga-Bibliothek」叢書が最初である。1892年から1929年にかけてハレのマックス・ニーマイヤー社から全18巻で公刊されたこのシリーズは、収録されたタイトルこそ多いとはいえないものの、ドイツ文献学の作法にのっとった厳密な校訂により、その後のサガ刊本一つの模範となった。この叢書は今でも参照されるが、現在標準的な刊本として人口に膾炙しているのは、古アイスランド語・テキスト協会が刊行をすすめる「アイスランド古テキスト Íslenzk fornrit」叢書である。本叢書は「古ノルド語サガ・ビブリオテーク」を範として、1928年にヨーン・アスピョーンソンが計画をした<sup>3</sup>。彼が協会会長として実務を担当する一方、アイスランド大学のシグルズル・ノルダルがこの叢書の実質的編者となり、彼自らも『エギルのサガ』を校訂した<sup>4</sup>。この叢書は、前文に長大なテキスト研究の成果、巻末に詳細な

地図と目次を備えており、現在のサガ研究において決定的な役割を果たしている。

こうしたサガの研究は膨大な数にのぼり、その複数の流れを整理することすら困難である。しかしながら、この時期に主たる論争の対象となったのは「アイスランド人のサガ」の歴史性と作家性であった<sup>5</sup>。現在の歴史研究に不可欠の「王のサガ」や「同時代サガ」の研究は、文献学的に厳密な写本の系譜史もしくは文体論やプロット構造論といったアプローチが主流であったように見える。なお、研究の中心は、古ノルド語写本の大部分を所有していたコペンハーゲン大学付属「アルニ・マグヌッソン研究所 Árni Magnússon Institute」であり、研究所の研究紀要には今なお参考にすべき重要な論考が残されている<sup>6</sup>。

### (2) 詩エッダ

詩エッダとは、ゲルマン神話世界を描いた韻文の集成である。そのおおよそは、1643年にスカルホルト主教ブリュンヨールフル・スヴェインソンがアイスランドで入手し、デンマーク王に献呈した「王室写本 Codex Regius」と呼ばれる13世紀半ばの写本に記されている。この詩エッダが巷間の耳目を惹いたのは、19世紀にロマン主義運動が興隆するなか、そこにキリスト教化の過程で失われたはずのゲルマン神話の世界が描き出されているといった理解ゆえである。

最初の学術レベルの詩エッダの校訂版は、1867年にノルウェー中世研究の立役者ゾーフス・ブッゲ(1833-1907)が出版したものである<sup>7</sup>。このブッゲ版はその質の高さから、1965年になっても再版されている。しかしながら、現在の標準版としてしばしば利用されるのは、初版が1914年に用意されたグスタフ・ネッケルによる校訂版である。ネッケルの刊本はテキストとコメンタリーの2巻構成であり、1983年にはゲルマニストであるハンス・クーンによって補訂された第5版が出ている<sup>8</sup>。なお、19世紀後半にはフーゴー・ゲリンクによる版も公刊されているが、彼がその版に従って1903年に用意したグロッサリーは、詩エッダの研究にとって不可欠である<sup>9</sup>。

なおエッダには、もう一つ散文エッダと呼ばれるものがあり、これはアイスランドの在地有力者

スノッリ・ストゥルルソン (1178-1241) の手になる、神話に関する論考と詩作法の集成である<sup>10</sup>。本来はこちらを指して「エッダ」と呼び習わされていた。散文エッダには13世紀から16世紀にかけていくつかの写本が作成され、19世紀以来それぞれに基づいた校訂が何度か用意されている。研究者に長らく利用されてきた版は、フィンヌル・ヨーンソンによるものである<sup>11</sup>。

### (3) スカルド詩

スカルド詩とは、9世紀から14世紀半ばにかけて、その多くはアイスランドを出自とするスカルド詩人によって謡われた韻文である。このスカルド詩は、匿名であるエッダ詩とは対照的に各詩を作成した詩人の名前の多くが伝来しており、また、エッダ詩とはやや異なる独特の韻律ならびにケニングと呼ばれる複雑な比喻表現を特徴とする<sup>12</sup>。

スカルド詩の校訂は、1912年から15年にかけてフィンヌル・ヨーンソンが手がけた。A本とよばれる写本に基づいたものと、B本とよばれるヨーンソン自身による校訂の2部構成であり、B本にはデンマーク語訳が付されている<sup>13</sup>。今なおこの刊本が標準版として通用してはいるが、B本にはヨーンソン独自の理解にしたがって写本とは異なる再現をされたものがある点は、注意する必要がある。スカルド詩は、それが作成された時代から数世紀隔たった後に写本に記録されたものが殆どであり、テキストの意味を正確に理解するだけのコンテキストを欠いているため、本来のテキストを再現することが困難だからである。1931年、ヨーンソンはこの校訂と平行して、スヴェイビョルン・エギルソンがラテン語で準備した原稿に基づいたスカルド詩辞典をデンマーク語で公開したことも忘れてはならない<sup>14</sup>。その後、ヨーンソンのB本の再現に疑問を抱いたルンド大学のA・コックは、新しい校訂を試みた<sup>15</sup>。この校訂版は、膨大な量の注釈が施された研究の成果であり、彼の一連のモノグラフはヨーンソンの校訂版を用いるにせよコックの校訂版にせよ、スカルド詩研究においては不可欠の手引きとなる<sup>16</sup>。

このスカルド詩に関する文献学的研究は、主として北欧とドイツの専門家によって相当数の研

究が積み重ねられている<sup>17</sup>。ただし、体系的研究というよりは、詩単位や表現単位の研究が主であり、この段階においてはスカルド詩全体がもつ社会的意味という歴史学と切り結ぶ場にまで関心が向いていたようには思われない。ヨーンソンやヘルガソンの文学史の該当部が、ながらくスカルド詩を理解するための入門であった<sup>18</sup>。

### (4) 法史料

アイスランドに伝来する諸法、とりわけ「自由国」時代の法文を集成した法書「グラールグース Grágás」は、一つは「原ゲルマン *urgermanisch*」の息使いを残す貴重な証言ゆえに、もう一つは13世紀というヨーロッパにおける「法編纂の時代」を代表する法テキストゆえに、特別の注意が払われてきた<sup>19</sup>。

「グラールグース」の校訂を進めたのは、コペンハーゲン大学で教育を受けたヴィルヒャルムル・フィンセン (Vilhjálmur Finsen, 1823-92) である。「グラールグース」にはいくつかの写本があり、それぞれの間にはかなりの違いがある。フィンセンは1852年から70年にかけて、最も古い「王室の本 *Konungsbók*」(13世紀半ば)のテキストを<sup>20</sup>、1879年には「スタザルホルト本 *Staðarhóltsbók*」(c.1270)の<sup>21</sup>、1893年には「スカールホルト本 *Skálholtsbók*」(c.1360-1400)のテキストも校訂した<sup>22</sup>。フィンセンは校訂を進めると同時に、「グラールグース」に関するいくつかの論文を専門誌に執筆した。彼によるテキストは1世紀以上も標準版としての地位を保ち、1937年にはA・ホイスラーによるドイツ語訳も刊行された<sup>23</sup>。

さて、アイスランド中世法といえば「グラールグース」ばかりが注目されるが、「ヤールンシーザ *Járnsiða*」と「ヨーンスポーク *Jónsbók*」も忘れることはできない。前者は、1271年、ストゥーラ・ソールザルソンが、ノルウェー法であるグラシグ法やフロスタシグ法を参考にしながら編纂し、ノルウェーの支配下に入ったアイスランドに適用させようとした法群である<sup>24</sup>。他方、「ヨーンスポーク」は、ノルウェー王であるマグヌス6世ホーコンソン治世下の1281年、ヨーン・エイナルソンが「グラールグース」から多くの規定を採用して編纂した法群である<sup>25</sup>。この「ヨーンスポーク

ク」は、その後近代にいたるまで長年アイスランド人が依るべき法集成となり、実に 300 以上の写本が今に伝えられている。ただ、「ヤールンシーザ」にせよ「ヨーンスポーク」にせよ、それらもつアイスランド法制史上の重要性にもかかわらず、これまで掘り下げて研究された痕跡はない。その理由の一つは、「ヤールンシーザ」も「ヨーンルポーク」も、「自由国」解体後の法であったからと考えられる。

最後に、『アイスランド文書集成 (Diplomatarium Islandicum)』について簡単に触れておこう。1857 年から 1976 年にかけて、アイスランド文学協会の助力により全 16 巻で刊行されたこの史料集成は、アイスランドに関わる中世文書史料を網羅的に収集したものである。この企画に手をつけたのは、アイスランド建国の父とも呼ばれるヨーン・シングルズソン (Jón Sigurðsson, 1811-79) であり、彼が関わった第 1 巻は、建国から 1264 年までのまさに「自由国」時代を対象としている<sup>25</sup>。

### 3. 「自由国」から「人類学の島」へ

#### (1) ドイツ古典学派

史料類型ごとの校訂とその文献学的研究が進む中で、中世アイスランド社会像の再現に精力を注ぎ、古典的なアイスランド社会像を描出したのは、ベルリン大学法学部教授コンラート・フォン・マウラー (Konrad von Maurer, 1823-1902) であった<sup>27</sup>。1858 年にアイスランドを旅行し、アイスランドの内的条件に関心を持ったマウラーは、1874 年に『最初の発見から自由国家の没落にいたるまでのアイスランド』という、中世アイスランド研究の古典ともいえる作品を刊行した<sup>28</sup>。2 部構成となっており、第 1 部「自由国家の歴史」では、9 世紀の植民期から 1262/64 年のノルウェーへの併合に至るまでの通史を、第 2 部「自由国家最盛期における内部状態」では 12・13 世紀アイスランドにおける社会構造を扱っている。

しかしながら法制史上彼の名を不朽のものとしせしめたのは、彼がミュンヘン大学で行った講義である。1858 年のマウラー死後に彼の寡婦ヴァレリーの協力を得て、ノルウェー人法制史家エッベ・ヘルツベリ (Ebbe Hertzberg, 1842-1907) がまとめたその講義録は、1907 年から 10 年にかけて 6

巻本としてオスロで出版された<sup>29</sup>。『古北欧法史に関する講義』と表題されたこの大部の講義録は、「古ノルウェー国法と裁判制度」、「古北欧教会制度と婚姻法について」、「古北欧法による、親族権、相続権、担保権」、「アイスランド自由国家の国法」、「古アイスランド刑法と裁判制度」からなる。現在においてなお、マウラーの業績を凌駕する法制史的研究はなく、事実上の基本文献である。

マウラーの研究業績は、ドイツの学者世界に対し、ゲルマン古社会との関係という点からアイスランドの歴史資料に深い関心を持たせた。マウラーの衣鉢を継いだ 2 人の偉大な研究者を挙げておきたい。一人は、カール・フォン・アミラ (Karl von Amira, 1848-1930) である<sup>30</sup>。長年フライブルク大学に奉職した後ミュンヘン大学へ移った彼は、法生活に遺る古ゲルマン社会の慣習を掘り起こす法考古学という分野を開拓した<sup>31</sup>。マウラーの教え子でもあったアミラは、北欧法の分野において大きなモノグラフを残した後に<sup>32</sup>、ゲルマン法全体のあり方を考察するに至った。北欧法を含めたゲルマン古法を通覧した『ゲルマン法』は、アミラによる法制史研究の集大成であるが、いまなおドイツ法制史の基本書であり続けている<sup>33</sup>。もう一人は、スイス人であるアンドレアス・ホイスラー (Andreas Heusler, 1865-1940) である<sup>34</sup>。ホイスラーは 1914 年から 19 年までベルリン大学教授をつとめ、その後 1920 年から 36 年まで故郷であるパーゼル大学で教鞭をとった。ホイスラーは、アイスランド語の文法書から韻文や散文の翻訳まで、特定のディシプリンに拘らず中世アイスランドに関わる研究を幅広く手がけているが、そこには『アイスランド・サガの中の刑法』や『ストゥルルンガ時代におけるアイスランドのフェーデ制度』という研究書も含まれている<sup>35</sup>。いずれにせよこの両者が、マウラー以降のドイツ語圏における中世アイスランド研究を方向付けたと言って良い。

このような個別研究に加えて、20 世紀初頭のドイツでは、ホイスラーの翻訳による「グラールーグ」を含むゲルマン諸法を集成した「ゲルマン法 Germanenrechte」と、アイスランド古文献を集成した全 24 巻の「チューレ：古ノルド語の韻文と散文 Thule: altnordische Dichtung und Prosa」

(1912-30)というドイツ語訳シリーズが準備された。ここで一点指摘しておきたいのは、マウラー以降の流れの中で、いわゆる部族法典と北欧諸法をゲルマン法として一括して論じ、アイスランドに伝承する13世紀以降の古文獻の中にゲルマン古代の残滓を読み取ろうとする傾向である。このような見方はドイツの学会内においては長らく続いたが、現在では共通する「ゲルマン性」や「ゲルマン人」という概念に対しては懐疑的になりつつある<sup>36</sup>。

## (2) アイスランド学派と「自由国」

アイスランドでは、ドイツと異なる方向での研究が進められた。対照的に捉えるとするならば、ドイツでは法史料に重きがおかれていたのに対して、アイスランドでは「サガ史料群」を中心とする叙述史料がその論議の中心であった。

アイスランドの中でも、比較的早い段階からボギ・メルステズ(Bogi Th. Melsteð)やヨーン・アジルス(Jón Jónsson Aðils)によるアイスランド史の概観があるにはあったが<sup>37</sup>、必ずしも学術的に満足のいくレベルであったわけではない。20世紀の前半、アイスランドの研究者に深い影響を与えたのは、文学史家であるシグルズル・ノルダル(Sigurður Nordal, 1886-1974)の研究である。1914年にコペンハーゲン大学で、「聖オーラヴのサガ」に関する研究で学位を取得した彼は、ベルリンとオックスフォードでの調査を経て、1918年にアイスランド大学の教授となった。スノッリ・ストゥルルソンに関する伝記的研究や「エギルのサガ」の校訂のように、現在でも参照される業績を残した彼は、1942年に『アイスランド文化』を上梓した<sup>38</sup>。作家としての作品も公としていたノルダルは、過去と現在を往還するその叙述の中で、現代アイスランドの文化的背骨へと繋がる文学的源泉として中世のサガを位置づける。ややもするとテキストへの言及を欠く歴史哲学的な議論へと流れる危険性はあるが、アイスランドというコンテキストの中にサガ文学を置き直したことは、ゲルマンという枠組みでアイスランドの史料群へ接近したドイツとの対比においても注目すべきである。もちろん、アイスランドが1944年にデンマークからの独立を果たしたという背景を考

えれば、ノルダルの著作をアイスランド・ナショナリズムと結びつけ、アイスランドでの熱狂的な受容を理解することは容易い。なおノルダルは、アイスランド大学の終身教授となる一方で、1951年から57年まで在デンマーク・アイスランド大使職を務めている。他方、ノルダルの中世アイスランド理解が江湖に受け入れられる一方で、アイスランドにおいても国制史的なアプローチを採る研究者がいたことも指摘しておきたい。代表的な人物は、コンラート・マウラーやヴィルヘルム・フィンセンの成果を承けたアイスランド大学法学部教授オーラヴル・ラウルソン(Ólafur Lárússon)であり、彼は幾つかの著作をまとめるともに、『北欧中世文化史事典』のアイスランド法関係の項目にも多数寄稿している<sup>39</sup>。

その後、アイスランド内で培われた中世文学と国制史双方の成果を吸収し、最も注目すべき成果を残したのは、ヨーン・ヨーハネソン(Jón Jóhannesson, 1909-57)である。彼の手になる『古アイスランド共和国史』(1956)は<sup>40</sup>、現在なお中世アイスランド研究において参照される通史であるが、ノルウェー語訳されることによってスカンディナヴィアの学界で、さらに英訳されることで世界の中世史家の間で<sup>41</sup>、容易に入手されるようになった。「植民の書」の写本系譜研究によって学位を取得した著者は<sup>42</sup>、「ストゥルルンガ・サガ」の校訂も手がけており<sup>43</sup>、その個別研究の成果は、アイスランド自由国解体期までの政治、国制、経済、宗教、文化を過不足無く扱った本書の中に遺憾なく発揮されている。

以上述べてきたアイスランド研究者によるアイスランド史叙述の中に共通する基調要素が2つある。1つは、アイスランドを、支配被支配関係の見られない自由農民による平等主義的な共和国として描き出している点であり、もう1つは、1262年以降のノルウェー王権による支配時期を、それ以前の「自由国／共和国」と対比して没落の時代と価値判断している点である。この2つの要素は、中世アイスランド史を他のヨーロッパ地域とは異なる特殊な空間とし、多くの研究者の関心を集める一方で、地域間比較や交渉史的アプローチにとって高い隔壁となっていた点は銘記しておきたい。

### (3) 転換点としての人類学的アプローチ

1980年代、従来のアイスランド研究を一変させる一連の研究があらわれる。いずれも通常の文献学的歴史学とはことなり、文化人類学という相対的に新しいディシプリンを十二分に吸収した成果である。アプローチの異なる代表的な研究者を、3人挙げておこう。

1人はコペンハーゲン大学のキアステン・ハストロップ (Kirsten Hastrup, 1942-) である。オックスフォード大学とコペンハーゲン大学で博士号を取得したハストロップは、『中世アイスランドにおける文化と歴史』(1985)、『アイスランドにおける自然と政策 1400-1800』(1990)、『分かたれた場所』(1998) というアイスランドをフィールドとした一連の著作を通じて、その後のアイスランド研究に大きな影響を与えた<sup>44</sup>。彼女は、文献史料に加えて豊富な現地調査から得たデータを用いて前近代北歐世界の祖景としてのアイスランドの再構成を目指した。文献の精査を欠く彼女の方法論に対する疑問も欠くはないが、従来の文献学的アプローチでは明らかにしえなかったアイスランド社会の構造的特徴、とりわけ牧畜社会としてのアイスランドの生活パターンとそこから派生するメンタリティを引き出したという点ではエポック・メイキングな研究である<sup>45</sup>。

2人目は、カリフォルニア大学バークレー校のジェス・バイヨック (Jesse L. Byock, 1945-) である。おそらく現在最も著名なアイスランド研究者の一人であるバイヨックは、1978年にハーヴァード大学のテオドール・アンダーソンのもとで博士論文を仕上げるまで、ソルボンヌ、アイスランド、ルンドで学んだ。邦訳もされた『アイスランド・サガにおけるフェーデ』(1982)では、様々な類型のサガに見える紛争解決の諸場面に目を向け、アイスランド社会に想像以上に広がっていたフェーデ(血讐)という行為の機能を明らかとした<sup>46</sup>。その後執筆された『中世アイスランド』(1988)では、「ストゥルルンガ・サガ」からの史料知見を中心に据え、したがって13世紀を中心とする中世アイスランド社会の様々な側面を、具体例を挙げながら解説する<sup>47</sup>。著者の最近作である『ヴァイキング時代アイスランド』(2001)は、ヨーハンネスソンの著作と同じく、移民時代からノルウ

ェーへの併合までを扱う通史である<sup>48</sup>。

3人目は、ミシガン・ロースクールのウィリアム・イアン・ミラーである。彼は、文献学者テオドール・アンダーソンの指導により博士号を取得し、『血讐と平和創生』(1990)を刊行した<sup>49</sup>。バイヨックと同様、「アイスランド人のサガ」という史料類型に見えるフェーデに注目し、国家という「公的な」強制力を持たない空間において、「名誉」や「気前のよさ」といった価値を重視する「私的な」社会関係がいかにしてアイスランドの社会秩序を維持していたのかを分析する。同僚であったステイーヴン・ホワイトから大きな影響を受けており、近年活況を呈する紛争解決研究のアイスランド版といえる<sup>50</sup>。

上記3者には共通点が2点ある。1つは、従来の歴史研究では及び腰であったサガを積極的に利用している点である。その際、そこに書かれている出来事がフィクションかノンフィクションかという択一的な問いを立てるのではなく、そのサガが書かれた時代の価値観やメンタリティが反映された史料として、掬いあげるのである。もう1つは、アイスランド社会を編年的にはなく、構造的に捉えようとする視点である。もちろん、構造アプローチはややもすると歴史の経年変化を捨象してしまうという問題点もあるが、これによって他地域との比較可能性は一段と高まったと言える。

### 4. 近年の展開

以上述べたように、文化人類学による知見を十分に吸収した中世アイスランド研究は、とりわけ英米圏において注目を集めることになる。英米圏において北歐中世史といえば、それは殆どアイスランド史と同義であるという、いささかいびつな状況を現出せしめたという点は留意しなければならないが、英語文献が横溢することにより中世アイスランド研究への敷居は格段に低くなった。日本におけるアイスランド研究受容もこの文化人類学的研究の興隆と軌を一にしており、バイヨック等いまなお導き手となる重要な文献の翻訳もあらわれたし、「エッダ」や「アイスランド人のサガ」に代表される重要な中世アイスランド文献の原典からの翻訳もやはり1970年代後半以

降に集中している<sup>51</sup>。とはいえ、世紀転換期をむかえ、欧米では新しいタイプの中世アイスランド研究が陸続と公開されるようになった。本節では、そういった近年の研究の一端を大まかに5つに分けて整理するとともに、最後に日本における中世アイスランド研究の歩みを簡単に振り返ってみたい。

### (1) 「自由国」像の相対化

既に確認したことであるが、20世紀における中世アイスランド研究は、それが編年継起と社会構造を重視する立場を選択した場合、1262/64年のノルウェーによる併合以前の時代を対象とすることが暗黙の了解であったように思える。

しかしここきて、従来の「自由国」像の足元を切り崩すような研究が、私たちの手元に届けられている。最も明瞭に「自由国」像の再検討を迫ったのは、オスロ大学のヨン・ヴィザル・シグルズソンであろう。彼の博士論文に基づいた『アイスランド共和国における首長と権力』(1999)は、実に豊かな内容を持つ研究であるが、そこでは「平等主義的な自由農民像」のかわりに、階層化された諸集団から構成される社会を想定している<sup>52</sup>。シグルズソンの主張は、必ずしも新奇なものではなく、彼以前の研究者もある程度は意識していた事実ではあるが、平等主義的イデオロギーと相反する階層化社会という社会像を明確に提示した功績はシグルズソンに帰せねばならない。シグルズソンと同様に「自由国」時代のアイスランドに階層化された権力構造を見るのは、イギリスの若手研究者クリス・カーロウである。彼は「中世アイスランドにおける過去の再構成」という近稿で、「ラックス谷のサガ」を材料とすることにより、アイスランドの在地有力者が家門系譜を利用しながら地域で優位な立場を得るその過程を実証している<sup>53</sup>。

### (2) 中世後期への注目

アイスランド中世史の研究の多くが「自由国」時代に限定されていたのは、そこに「自由国」に対する懐古的な集団記憶が関わっていたからであることは確かである。しかしながら他方で、史料上の問題があったことも指摘しておかねばな

らない。つまり、従来のアイスランド研究の根本史料となっていた内容豊かな「アイスランド人のサガ」、「国王サガ」、「同時代のサガ」は13世紀をもって姿を消すため、それ以降の歴史に接近する場合には「司教サガ」、編年誌、ノルウェー側に残る行政文書や書簡に頼らざるを得ないのである。

従来も中世後期のアイスランド史に関する研究は皆無というわけではなく、既に20世紀半ばの段階で、アイスランド大学のヨン・ヨーハンネスソンは中世後期に関わる論文を複数発表していたし<sup>54</sup>、1974年以來公開を続けてきたシグルズル・リンダル編『アイスランド史』の第3巻から第5巻は<sup>55</sup>、現在最も詳細な中世後期のアイスランド像を提示している。とりわけアイスランド大学のビヨン・ソーステインソンが、第4巻ではノルウェーとの関係を、第5巻ではブリテン諸島との関係を論じている点は特筆に値しよう。しかしながら、このアイスランドの歴史家たちがあくまで国史としてのアイスランドという枠を堅持しているのに対し、近年のノルウェー史家は、ノルウェーの支配圏内におけるアイスランドという視点で中世後期のアイスランドを論じるようになってきた。クヌート・ヘッレヤスタイナー・イムセンは国制史的観点からアイスランドに列なる北大西洋島嶼とノルウェーの関係に接近し<sup>56</sup>、ヨン・ヴィザル・シグルズソンは「アイスランドとニダロス」(2003)という充実した論文によって教会史の文脈を整理している<sup>57</sup>。しかしながら最も注目すべきは、本稿に続いてその内容が詳しく論じられるであろうパトリシア・ボウリョーサ『アイスランド人とノルウェー王』(2005)<sup>58</sup>とランディ・ヴェアダール『ノルウェー王国とその収税地』(2006)<sup>59</sup>という2つの学位論文である。この2人の若手女性研究者の作業によって、従来外部世界と隔絶していたかのように扱われてきたアイスランド史を、ノルウェー史との関連において再考する手掛かりを私たちは得たことになる<sup>60</sup>。

### (3) 歴史史料としてのアイスランド文献

史料面についての研究も進展している。既に述べたように、エッダ、スカルド、サガには膨大な文献学的研究の蓄積があり、各テキストのヒスト

リオグラフィだけで1冊の研究書ができあがってしまうほどである<sup>61</sup>。それは、エッダにせよスカルドにせよサガにせよ、いずれも後世の写本の中に採録されたかたちでしか現在に伝来しておらず、成立当初のナマの姿を再現することが困難であったからである。もちろん、テキストの校訂、写本の系譜関係の確定、成立年代の推定といった基礎的作業は今後とも継続してゆかねばならないが、近年は旧来とは異なる問題関心から各テキストに接近する研究が現れている点を指摘しておかねばならない。

スカルド詩研究は、近年急速な展開を遂げている。最も顕著な成果は、2008年以降順次刊行される『中世スカンディナヴィアにおけるスカルド詩』という、フィンヌル・ヨーンソンのそれにとって代わる全スカルド詩の校訂版である<sup>62</sup>。英語の対訳も予定されており、この基礎作業が完成した暁には難解をもって聞こえたスカルド詩への接近が格段に容易となるだろう。しかしながら最近目を引く研究は、そのスカルド詩が利用されたコンテキストに関わる研究である。2人の名前を挙げておきたい。一方はグズルーン・ノルダル『リテラシーの道具 12・13世紀アイスランド・テキスト文化におけるスカルド詩の役割』(2001)である<sup>63</sup>。彼女は従来の研究の多くがそうであったように、ヴァイキング文化の精華の一つとしてのスカルド詩ではなく、ある程度成熟した12世紀以降のアイスランドという社会においてスカルド詩が果たした役割に注目する。サガばかりが注目される盛期中世アイスランド文化空間の中で、スノッリのエッダや「アイスランド文法書」との関係において韻文の果たした役割を評価しようとする本書は、これまで知られることの無かったアイスランド中世文化の一側面を明らかにしつつあると言えるだろう。もう一方は、マシュー・タウネンドによる一連の論文である<sup>64</sup>。いずれも、スカルド詩というテキストそのものというよりも、そのスカルド詩が利用されたコンテキストを再現し、テキストの持った意味を明らかにしようとの試みである。ヴァイキング時代のスカルド詩の多くは王侯の事績を顕彰する顕彰詩であり、王侯の宮廷で繰り返し朗唱されたはずである。しかしながらこれらスカルド詩は、本来のコ

ンテキストと切り離された状態で、後世のサガをはじめとする別のテキストに組み込まれて現在に伝来しているものが殆どである。そのような点を考慮するならば、コンテキストを再現することによって、従来解釈の難しかったテキストの意味を確定することにも近づく。

他方、サガ研究においても、近年ではそのテキストが生産されるコンテキストへの関心が深まっているように思える<sup>65</sup>。アメリカにおけるサガ研究の第一人者であるテオドル・アンダーソンはある書評論文において、近年公刊された5つのサガ研究をとりあげ、そこにコンテキストに対する関心をみる<sup>66</sup>。更に彼の近著は、1180年から1280年という「アイスランド人のサガ」形成にとってもっとも重要な時期において、サガの中で語られるテーマ、つまり読者に対して強調されるべき価値が、あるサガから別のサガへ継受される過程でいかに変容していくのかを論じている<sup>67</sup>。対象とされるテキストの出発点は「オーラヴ・トリュグヴァソンのサガ」つまり「王のサガ」であり、終着点は「ニヤールのサガ」つまり「アイスランド人のサガ」である。内容に従った従来のサガ分類の枠を超える作業であり、テキスト生成論的な観点からも興味深い。近年の成果をもう1つあげておこう。エリザベス・ローウェ『フラート島本の展開、アイスランド、1389年におけるノルウェー王朝の危機』(2005)は、中世アイスランド写本の中で屈指の美しさを誇る「フラート島本」を対象とした研究であるが、その写本の生成過程を、同時代の歴史経過というコンテキストの中に位置づけようとする試みである<sup>68</sup>。「フラート島本」という一写本そのものが文学学以外で研究対象となることは珍しいが、写本文化はアイスランド中世社会を特徴づける一つの局域であり、今後注目されて良い分野であろう。

また、ここにきて法史料の研究も再度注目を集めている。以前とは異なり、ゲルマン法との関連ということではなく、純粋に盛期中世におけるアイスランドのコンテキストの中で理解しようとする点に留意したい。近年公刊されたグンナー・カールソンのアイスランド国制にかかわる大著は、グラールガースを十分に利用した成果の1つである<sup>69</sup>。また、諸法のテキスト公刊も進み、21世



紀に入ってグラーガース、ヤールンシーザ、ヨーンスポークのいずれも新しい校訂版が用意された<sup>70</sup>。アイスランド諸法が、アイスランド歴史社会を読み解くための豊かな内容をもっていることは学界の共通理解でありながら、その内容に鍼を入れた研究は実は極めて少ない。アイスランド法研究はこれから開拓されるべき分野である。

#### (4) 中世考古学と自然科学

中世研究全体の流れに乗るかのように、近年アイスランドでも中世考古学が注目されつつある<sup>71</sup>。その中心的な担い手となっているのは、アイスランド大学のオッリ・ヴェーステインソンであり、彼はロンドン大学に提出した博士論文を公刊する前後から<sup>72</sup>、現地アイスランドでの中世農場の発掘に関する報告書とその分析成果を精力的に刊行している<sup>73</sup>。文献史学も十分に吸収した彼のフィールドは基本的にアイスランドに限定され、しばしば同じ考古学者であるアドルフ・フリズリクソンとともに報告書を作成している。しかしながら一方で、グリーンランドまで視野におさめた考古学者であるクリスチャン・ケラーやトマス・マックガヴァーンらとの共同研究も進めており、北大西洋世界に広がるノルウェー系スカンディナヴィア人の定住地域全体の社会構造の復元を進めている<sup>74</sup>。主として農場跡の発掘であるこのようなフィールド調査は、内容豊かなサガ史料群に恵まれない植民期や中世後期に関してはもちろんのこと、サガ史料における文学表象と現実の生活世界とのズレを明らかとするという点において、今後とも歴史学に大きな寄与をすることが予想される。このような考古学者からの問いかけに対する歴史学からの回答の一つが、ウェンディ・デーヴィスの編纂した『中世における人間と空間』(2006)に収録された、ビルナ・ラウルスドットイル「定住の組織化と廃村」、クリス・カーロウ「中世北部アイスランドにおける地理、共同体、社会政治組織」、オッリ・ヴェーステインソン「10世紀から13世紀アイスランドの基礎レベルにおける散居共同体」という3本の論文である<sup>75</sup>。この論文集は、同時代の文献史料だけではなく、後世の地籍資料や研究者自身による実測調査もあわせて、中世における共同体の生活空間の

再現を図ることにある。かつてマルク・ブロックが『フランス農村史の基本性格』で試みた手法と重なるものであり、社会経済史史料の少ないアイスランド研究に今後とるべき一つの道筋を与えているように思われる<sup>76</sup>。

以上は定住考古学的観点からの研究であるが、動物考古学からの寄与も紹介しておきたい。動物考古学そのものは既にかかなりの研究者を抱え、中世考古学において不可欠の分野となっているが、近年大きな歴史過程の中にその成果を反映させる研究者が現れてきた。ソフィア・ペルディカリスらによる近稿は、アイスランドを含んだ北大西洋世界で発掘される動物の遺骨データを統計的に処理し、基幹産業としてタラ漁を選択したアイスランドとセイウチ漁を選択したグリーンランドとのその後の歴史的経過と関連付けている<sup>77</sup>。もちろん、諸要因が複合して進路を決定付ける歴史過程を下部構造だけで判断することには慎重になるべきであるが、文献史料では得がたいデータだけに、大いに注目すべきである。いずれにせよ、アイスランドにおける生態学的構造は、それが大陸ヨーロッパと比べてかなりの程度住民の生活を規定しているということを考えれば、今後とも注目しておくべき論点となるだろう。

もう1つ、ここで触れておくべき興味深い業績を紹介しておきたい。それは、A・ヘルガソンらのDNA研究の成果である。ヘルガソンはアイスランド大学人類学科に籍を置く遺伝学者であるが、彼は現代アイスランド人のDNAを調査することにより、男性はスカンディナヴィア系との共通要素が多いのに対し、女性はゲール系、つまりアイルランドやスコットランドといった「ケルト周縁」との共通要素が多いことを立証した<sup>78</sup>。これは一部文献史学においても旧来より提示されていた説であったが<sup>79</sup>、自然科学側からの追認も得られたことになる。アイスランドはノルウェーからの移民によって形成されたという「定説」は、ヘルガソンらの研究によって、留保をせまられつつある。

#### (5) 受容史とヒストリオグラフィ

宗教改革の到来でカトリック世界が崩壊することによって、アイスランドの中世は終焉を迎え

る。しかしながら「中世アイスランド」という遺産は近代に入って再発見され、アイスランドの地域アイデンティティの増幅に一役買うことになる。こうした「中世アイスランド」の受容現象は、近年急速に関心を集めている<sup>80</sup>。

1つは写本伝承の歴史である。これはすでに西洋古典学において1つの確立した研究分野となっており<sup>81</sup>、アイスランドにおいても近代以降の写本伝承そのものであれば、たとえば諸刊本の冒頭をみればわかるように、既に相当の蓄積がある。しかしながら近年は、この伝承史に見え隠れする諸事実を、学問史、社会史、政治史といった観点から読み解く研究が増えている。アイスランド写本研究の立役者は、コペンハーゲン大学教授であり、のちその名を冠した研究所が設立されるアルニ・マグヌソンである。彼の人物や業績に関する研究は以前よりあることにはあったが、いまや写本史の専門家による包括的な伝記も手に入るようになった<sup>82</sup>。また、「王室写本」に代表されるアイスランド写本群がデンマーク政府からアイスランド政府に返還される過程を詳細に追ったグズルーン・ダヴィーズドッティル『写本のサガ』は、アイスランド写本がアイスランド・デンマーク関係史を考える上で必須の道具立てであることが理解される<sup>83</sup>。

もう1つは、アイスランド文献の翻訳とモチーフ仮借の歴史である。とりわけ文芸的要素の強い「アイスランド人のサガ」は、近代以降一個の個性ある中世文学作品として、各国語に翻訳されてきた。各国の文学空間におけるそれぞれの位置については、ドイツについてはユリア・ツェルナックが<sup>84</sup>、スウェーデンについてはアンナ・ワレットが<sup>85</sup>、イギリスについてはジョン・ケネディが<sup>86</sup>、詳細に追跡している。「ニャールのサガ」というアイスランド・サガの一つの作品に限定して、各国の翻訳とその受容者のイデオロギー反映を論じたのは、ヨーン・カール・ヘルガソンの研究である<sup>87</sup>。また、こうした近代語への翻訳は、とりわけロマン主義時代の作家や批評家に深甚な影響をあたえたが、その系譜学についても少なからぬ研究を手にすることができる<sup>88</sup>。

サガ文学は以前よりアイスランド黄金時代の成果であるとの認識がある。それがロマン主義の

勃興を背景としてアイスランド人の愛郷意識、ひいてはデンマークからの独立へとつながる愛国意識と結びついていたことを指摘するのは、ジェス・バイヨックやグンナー・カールソンの研究である<sup>89</sup>。とりわけ、バイヨックの論考「近代のナショナリズムと中世のサガ」は、サガに焦点を絞っているという点で注目に値する<sup>90</sup>。これらの研究は、近代アイスランドという枠組みの内部におけるアイスランド文献の受容を論じるが、他方で、「原ゲルマン」観念につながる「アイスランド的なるもの」の表象としてのアイスランド・テクスト群への関心は、近代ドイツ語圏における「民族精神 Volksgeist」との関係において、種々の刻印を残した。「エッダ」を扱ったクラウス・ベルドルに作品に関しては後ほど詳しい紹介がなされるが<sup>91</sup>、それに加えて、とりわけリヒャルト・ワグナーの歌劇「ニーベルンゲンの指輪」と<sup>92</sup>、ナチス・ドイツによる「ゲルマン性 Germanentum」に研究が集中している。とりわけ後者に関しては、邦訳もあるジョージ・モッセの基本書に加え<sup>93</sup>、クラウス・フォン・ゼーによる、執拗といってもよい一連の研究を手にすることができる<sup>94</sup>。宗教学の展開との関連から同じテーマを扱った深澤英隆の近著も注目に値しよう<sup>95</sup>。

#### (6) グンナー・カールソン『アイスランドの1100年』(2000)<sup>96</sup>

以上述べてきたように、アイスランド本国においても、また欧米諸国においても、アイスランド中世史をめぐる研究状況は新しい段階を迎えている。このような中であって、アイスランド大学教授グンナー・カールソンが近年公とした通史について触れておきたい。

『アイスランドの1100年』と表題された英語によるこの個人通史は、植民期から20世紀にいたるまでのアイスランドの歩みを400頁に収めている。カールソンの名前は既に何度も触れているが、文献学的作業を残す一方で、中世から近代までの、主として国制に関わる問題を広く扱う、現代アイスランドを代表する歴史家である。全体は、第1部「植民と共和国 c. 870-1262」、第2部「他者の支配の下で 1262-c. 1800」、第3部「初期社会が国家を建設する 1809-1918」、第4部「20

世紀の大変容」の4部に分かれている。図版も多く、バランスのよい通史であるが、本稿との関連において注目すべきは、第2部にかなりの枚数(87-192頁)が割かれている点である。既に述べたように、ノルウェーの支配にはじまるこの時代は、史料の貧しさと国民感情とが相乗することで、これまで研究が手薄であった時代である。しかしながら本書では、カールソン自身が進めた個別研究の成果を咀嚼して、ノルウェー王権やイギリス商人という外部勢力との関係の中で、極めて冷静に中世後期のアイスランド社会を描出している<sup>97</sup>。2000年に出版ということもあって、前述した近年の研究成果は必ずしも反映されているわけではないが、一定の分量をもって中世後期のアイスランド像をわれわれに伝えるほぼ唯一の個人通史である。定評あるヨーン・ヨーハンネソンの概論と併せて、まず参考にすべき作品であろう<sup>98</sup>。

#### (7) 日本における中世アイスランド研究

最後に、ごく簡単ながら、日本におけるアイスランド研究の歩みを概観しておこう。

日本におけるアイスランド中世世界の紹介は、明治にさかのぼる。文部省の依頼により箕作麟祥が中心となって進めた「チャンブルの百科全書」という企画の中には、菌鑑訳『北欧鬼神誌』(1878)として「エッダ」の梗概が収められていたし、小泉八雲が東京帝国大学英文科でおこなった講義(1896-1903)では「アイスランド・サガ」が紹介された<sup>99</sup>。その後も、松村武雄の比較神話学<sup>100</sup>、増田四郎の中世経済史、松下正雄の比較文学<sup>101</sup>などにおいて、アイスランドまたはそこに繋がる古ゲルマン世界へ言及されることは散発的ながらあったが、この段階ではまだアイスランド社会全体を視野に入れたアイスランド研究の体をなしていたわけではない。

アイスランド中世の特異性とその深淵を広く認知させたのは、山室静(1906-2000)である。『近代文学』同人であった山室は、児童文学とのかかわりでアンデルセン、トーベ・ヤンソン、アストリッド・リンドグレンといった北欧文学の紹介や翻訳の筆をとっており、その延長線上で中世アイスランド世界にも関心を持ったようである。彼はか

ならずもアイスランド語を習得したわけではなかったが、『アイスランド 歴史と文学』(1963)は、日本におけるアイスランド世界の平明な紹介として、広く読書界に受け入れられた<sup>102</sup>。1974年には、短編サガの翻訳集成である『赤毛のエリク記 古代北欧サガ集』も上梓している<sup>103</sup>。

他方、学術的なレベルでの中世アイスランド文学の紹介につとめたのは、谷口幸男(1923-)である。本来ドイツ中世文学を専攻していた谷口は、キール大学への留学を境に、アイスランド中世文学の研究へと転換した。この分野における谷口の最大の業績は、『エッダ』(1974)と『アイスランド・サガ』(1979)というアイスランド中世文学を代表する作品を原典から翻訳したことにある<sup>104</sup>。その後、1981年には学術団体である日本アイスランド研究会(現在は日本アイスランド学会)が創設され、谷口はその初代会長を務めた<sup>105</sup>。その後、この学会のメンバーが中心となり、中世アイスランド文学の翻訳を進めると同時に、各人による個別研究も主として専門誌や紀要に掲載されるようになった<sup>106</sup>。訳業の中では特に、菅原邦城による『巫女の予言』と『ヴォルスンガ・サガ』<sup>107</sup>、そして学会員の協力による『サガ選集』と『アイスランド・サガ 中編集』というアンソロジーを挙げておきたい。

さて、歴史学の立場から、中世アイスランド研究を精力的に進めたのは熊野聰(1940-)である。すでに堀米庸三もエッセイでアイスランド研究の重要性を指摘はしていたが、研究書や史料へのアプローチの問題もあって、まだ研究という段階には達していなかった<sup>108</sup>。一橋大学の増田四郎のもとで研究をはじめた熊野は、ヴァイキング時代の商業史に関するいくつかの手堅い論文を公表した後、中世アイスランド研究へと転換した。『共同体と国家の理論』というリジッドな理論書で得た枠組みと<sup>109</sup>、幾つかの類型のサガや『植民の書』という歴史史料を利用して、アイスランド国家形成に関する論考を専門誌上に掲載した。学位請求論文である『北欧初期社会の研究 ゲルマンの共同体と国家』(1986)に収録された、第2章「アイスランド植民と土地所有」(初出1969)と第3章「初期アイスランド社会の秩序と機構」(初出1975)は、日本で初めてといってもよい初期アイ

スランド社会の本格的な研究である<sup>110</sup>。1983年に、一般向けに執筆された『北の農民ヴァイキング』は、「農民ヴァイキング」という、ノルウェー史学内では比較的なじみがありながら、その他のヨーロッパ諸国では必ずしも認知されていなかったヴァイキング生活の側面を、やはりアイスランドの史料を用いながら再現している<sup>111</sup>。熊野のその後の研究では、グレーヴィチが追求した贈与概念をキーワードに、バイヨックやミラーといった多分に文化人類学的な視点を導入したアイスランド研究の成果を取り入れ、「アイスランド人のサガ」の世界のマイクロヒストリーに集中している<sup>112</sup>。

## 6. 書評対象文献の紹介

以上、細かい論点に触れることなく、駆け足で19世紀後半以来の中世アイスランド史研究を辿ってきた。当然のことながら、以上の道筋は筆者の関心と経験に従ったものであり、必ずしも全ての研究者の合意を得ることができるものではないだろう。それは承知の上でのスケッチである。

最後となったが、本特集の書評対象文献を紹介しておきたい。ローリ・マクターク編『古ノルド語・アイスランド語文学と文化のためのコンパニオン』(2005)、パトリシア・ピレス・ボウリョーザ『アイスランド人とノルウェー王』(2005)、ランディ・ビョスホル・ヴェアダー『ノルウェー王国とその収税地』(2006)、クラウス・ベルドル『エッダの神話』(2000)の4冊である。論点を定めた

詳細な紹介は各評に譲るが、全体としての意図を述べておきたい。小澤による『コンパニオン』は、中世アイスランド文学と文化の接点を探る手引き、松本涼による『アイスランド人とノルウェー王』は、アイスランドとノルウェーの関係を論じる際にしばしば言及はされるものの、ながらく本格的な検討対象となっていなかったいくつかの法史料を、写本レベルからいわば史料論的に再解釈しなおした博士論文、成川岳大による『ノルウェー王国とその収税地』は、アイスランドも含めた北大西洋に連なる島々をノルウェーの収税地として位置づけ、ノルウェー史の中でアイスランドの位置を相対化しようと試みた、これもまた博士論文である。中丸禎子による『エッダの神話』は、前記3文献とは異なり、中世アイスランドの歴史的事象を直接の対象とするのではなく、中世アイスランドのイメージを一手に引き受けていた「エッダ」の、ロマン主義時代における受容を扱う。既に確認したように、手引き、史料論、枠組みの問い直し、後世における受容史は、いずれも近年における歴史学全体の動向に棹差しており、そういった意味においては、他のヨーロッパ諸国と比べてやや孤立感のあったアイスランド研究も、ヨーロッパの研究潮流の中に組み込まれつつあるという印象をうける。

なお最後に、成川岳大による文献目録を添付する。紙幅の関係もあり、決して網羅的なものではなく、中世アイスランド史研究の導入としての役割を果たすものを選択している。

## 注

<sup>1</sup> なお、以下の叙述においては、アイスランド史学史に関わる次の文献を利用した。アイスランド史全体に関しては、Ingi Sigurðsson, *Íslensk sagnfræði frá miðri 19. öld til miðrar 20. aldar*. Reykjavík 1986; ld., *The Professionalization of Icelandic Historical Writing*, in: F. Meyer & J. E. Myhre (eds.), *Nordic Historiography in the 20th Century*. Oslo 2000, p. 149-63; Loftur Guttormsson, *The Breakthrough of Social History in Icelandic Historiography*, in: *Nordic Historiography in the 20th Century*. Oslo 2000, p.

265-79. アイスランド中世史に関しては、Gunnar Karlsson, *A Century of Research on Early Icelandic Society*, in: A. Faulkes & R. Perkins (eds.), *Viking Revaluations*. London 1993, p. 15-25; Helgi Þorláksson, *Sagnfræði um Íslandssögu á tímabilinu 1300-1550*, *Saga 38* (2000), s. 59-81; Jón Viðar Sigurðsson, *Allir sem sjá líta þó ekki jafnt á: Sagnaritun um íslenskar miðaldir fram um 1300*, *Saga 38* (2000), s. 33-57; ld., *Noen hovedtrekk i diskusjonen om islandske middelaldersamfunnet etter 1970*, *Collegium*

- Medievale* 18 (2005), s. 106-43; Id., *Tendencies in the Historiography on the Medieval Nordic States (to 1350)*, in: J. S. Amelang & S. Beer (eds.), *Public Power in Europe. Studies in Historical Transformation*. Pisa 2006, p. 1-15. 文献学の歴史に関しては, Finnur Jónsson, *Udsigt over den norsk-islandske filologis historie*. København 1918.
- <sup>2</sup> これは内容による分類である。更に広義に理解した場合、「騎士のサガ」、「メルヒェン・サガ」、「聖人伝」、「(偽)歴史翻訳」まで含めることもある。K. Schier, *Sagaliteratur*. Stuttgart 1970, S. 5-6.
- <sup>3</sup> ここ ([http://www.hib.is/fornritabae\\_kl\\_enska.pdf](http://www.hib.is/fornritabae_kl_enska.pdf)) に、このシリーズの簡潔な歴史がある。当面 38 巻を目標としているが、2007 年現在でまだ 24 巻にとどまっている。
- <sup>4</sup> Sigurður Nordal (rit.), *Egils saga Skalla-Grimssonar* (Íslenzk fornrit 2). Reykjavík 1933.
- <sup>5</sup> 「アイスランド人のサガ」がある特定の個人によって生み出されたとする「Buchprosa」説と、執筆される以前に既に口承によって完成されていたとする「Freiprosa」説との激しい応酬があった。A. Heusler, *Die Anfänge der Isländischen Saga*, in: *Abhandlungen der K. Preuss. Akad. d. Wiss., Phil.-Hist. Classe*. München 1912, S. 1-87.
- <sup>6</sup> コペンハーゲン大学付属アルニ・マグヌッソン研究所は、1956 年に設立され、2003 年にデンマーク方言研究所と地名研究所と統合されて、「北欧言語研究所 Nordisk Forskningsinstitut」に組み込まれた。研究所の前身は、コペンハーゲン大学教授であったアルニ・マグヌッソンの遺言に従って 1730 年に創設された「アルニ・マグヌッソン委員会」である。ヴィルヒャルムル・フィンセンによるグラールガース (1879-83) やフィンヌル・ヨーンソンによるスカルド詩 (1912-15) も、この委員会の監修のもとにあった。
- <sup>7</sup> S. Bugge (red.), *Norrøn fornkvæði: islandsk samling af folkelige oldtidsdigte om Nordens guder og heroer: almindeligt kaldet Sæmundar Edda hins Froda*. Christiania 1867.
- <sup>8</sup> G. Neckel & Hans Kuhn (hrsg.), *Edda: Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern*. 5. Aufl. Heidelberg 1983.
- <sup>9</sup> H. Gering, *Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda*. Halle 1903.
- <sup>10</sup> 中世以来、スノッリがまとめたとする散文エッダは知られており、その内容から、この散文エッダより以前の時代に詩エッダが成立したことは予想されていたが、「王室写本」の発見により、その予想が現実のものとなった。なお、「王室写本」は、長らくコペンハーゲンの王立図書館に所蔵されていたが、1971 年にアイスランドに返還された。この間の事情に関して、Sigrún Davíðsdóttir, *Håndskriftsagens Saga - i politisk belysning*. Odense 1999.
- <sup>11</sup> Finnur Jónsson, *Edda Snorra Sturlusonar efter Håndskrifterne af Kommission for det Arnamagnæanske Legat*. København 1931.
- <sup>12</sup> 日本語による簡潔な説明として、谷口幸男「スカルド詩人とケニング」吉田敬一編『レトリックと文体 東西の修辞法をたずねて』(丸善 1983)。
- <sup>13</sup> Finnur Jónsson, *Den norsk-islandske skjaldedigtning*. 4 bd. København 1912-15.
- <sup>14</sup> Finnur Jónsson, *Lexicon poeticum antiquae linguae septentrionalis / Ordbog over det norsk-islandske skjaldesprog*. 2 udg. København 1931.
- <sup>15</sup> ただしこの校訂版の出版を前にした 1943 年に、コックは死去している。E. A. Kock, *Den norsk-islandske skjaldedigtningen*. 2 vols. Lund 1946-50.
- <sup>16</sup> E. A. Kock, *Notationes norroenae. Anteckningar till Edda och skaldedigtning* (Lunds Universitetes Årsskrift, N.F. Avd.1) . Lund 1923-41.
- <sup>17</sup> 文献目録として、L. M. Hollander, *A Bibliography of Skaldic Studies*. København 1958.
- <sup>18</sup> Finnur Jónsson, *Den oldnorske og oldislandske litteraturs historie*. 3 vols. 2 udg. København 1920-24; Jón Helgason, *Norges og Islands digtning*, in: Sigurður Nordal (red.), *Litteraturhistorie B: Norge og Island* (Nordisk Kultur 8) . København-Oslo-Stockholm 1953, s. 3-179.
- <sup>19</sup> 中世盛期以降におけるヨーロッパの法編纂の歴史は、A. Wolf, *Gesetzgebung in Europa 1100-1500. Zur Entstehung der Territorialstaaten*. München 1996.
- <sup>20</sup> Vilhjálmur Finsen (red.), *Grágás. Islændernes Lovbog i Fristatens tid*. 2 vols. København 1852-70.
- <sup>21</sup> Vilhjálmur Finsen (red.), *Grágás, efter det Arnamagnæanske Haandskrift Nr. 334 fol. Staðarhóltsbók*. København 1879.
- <sup>22</sup> Vilhjálmur Finsen (red.), *Grágás. Stykker, som findes i det Arnamagnæanske Haandskrift Nr. 351 fol. Skálholtsbók*. København 1883.
- <sup>23</sup> A. Heusler (hrsg.), *Isländisches Recht: die Graugans* (Germanenrechte 9). Stuttgart 1937.
- <sup>24</sup> 校訂版は、Th. Sveinbjörnsson (red.), *Járnsiða 1271 His forna Lögbók Islendinga sem nefnist Járnsiða eðr Hákonarbók*. Hafniae 1847; Rudolf Keyser (red.), *Norges gamle Love indtil 1387*. bd. I Christiania 1846, s. 259-300; ヤールンシーザに関しては、Magnús Már Lárusson, *Járnsiða*, in: *KLNM* 7 (1962), col. 566-68.
- <sup>25</sup> ただし、その内容は「グラールガース」でまとめ

- られたアイスランドの法慣習と隔たっていたため、アイスランド人からは受け入れられなかった、とされる。校訂版は、Ólafur Halldórsson (red.), *Jónsbók. Kong Magnus Hakonssons Lovebog for Island, vedtaget paa Altinget 1281, og Réttarboetr af 1294, 1305 og 1314*. København 1904; ヨーンスポークに関しては、Magnús Már Lárússon, *Jónsbók*, in: *KLNM* 7 (1962), col. 612-17.
- <sup>26</sup> *Diplomatarium Islandicum*. Vol. 1: 834-1264. Reykjavík 1857.
- <sup>27</sup> マウラーに関して、K. Schier, Maurer, Konrad von, in: *Realllexikon der Germanischen Altertumskunde*. 2 Aufl. Bd.19 Berlin 2001, S. 453-64.
- <sup>28</sup> K. v. Maurer, *Island von seiner ersten Entdeckung bis zum Untergange des Freistaats*. München 1874.
- <sup>29</sup> K. v. Maurer, *Vorlesungen über altnordische Rechtsgeschichte*, hrsg. von Ebbe Herzberg. 6 Bd. Christiania 1907-10; Bd. 1. Altnorwegisches Staatsrecht und Gerichtswesen : Bd. 2. Über altnordische Kirchenverfassung und Eherecht; Bd. 3. Verwandtschafts- und Erbrecht samt Pfandrecht nach altnordischem Rechte; Bd. 4. Das Staatsrecht des isländischen Freistaats; Bd. 5. Altisländisches Strafrecht und Gerichtswesen; Bd. 6. Register.
- <sup>30</sup> アミラに関しては、P. Landau, H. Nehlsen & M. Schmoeckel (hrsg.), *Karl von Amira zum Gedächtnis*. Frankfurt am Main 1999.
- <sup>31</sup> 例えば、K. von Amira, *Der Stab in der germanischen Rechtssymbolik*. München 1909.
- <sup>32</sup> K. von Amira, *Das altnorwegische Vollstreckungsverfahren. Eine rechtsgeschichtliche Abhandlung*. München 1874; Id., *Altschwedisches Obligationenrecht*. Leipzig 1882; Id., *Westnordisches Obligationenrecht*. Leipzig 1995.
- <sup>33</sup> K. von Amira, *Germanisches Recht*, bearbeitet von Karl A. Eckhardt. 4 Aufl. Berlin 1960.
- <sup>34</sup> ホイスラーに関しては、次の論文集を参照。J. Glauser & J. Zernack (hrsg.), *Germanentum im fin de siècle. Wissenschaftliche Studien zum Werk Andreas Heuslers*. Zürich 2006.
- <sup>35</sup> A. Heusler, *Strafrecht des Islandersagas*. Leipzig 1911; Id., *Zum islandischen Fehdewesen in der Sturlungenzeit*. Berlin 1912.
- <sup>36</sup> エスニシティに関わる研究は既に膨大な数となっているが、例えば、W. Pohl, *Die Germanen*. München 2000 を参照。
- <sup>37</sup> Bogi Th. Melsteð, *Íslendinga saga*. 3 vols. Reykjavík 1903-30; Jón Jónsson Aðils, *Gullöld Íslendinga. Menning og lífshættir feðra vorra á söguöldinni*. Reykjavík 1906.
- <sup>38</sup> Sigurður Nordal, *Íslensk menning*. Reykjavík 1942 (*Icelandic Culture*). Ithaca 1990.
- <sup>39</sup> 例えば、若い頃のクヌート・ヘッレによりノルウェー語訳された研究として、Ólafur Lárússon, *Lov og ting : Islands forfatning og lover i fristatstiden*. Oslo 1960.
- <sup>40</sup> Jón Jóhannesson, *Íslendinga saga I. Þjóðveldisöld*. Reykjavík 1956.
- <sup>41</sup> Jón Jóhannesson, *A History of the Old Icelandic Commonwealth*. Winnipeg 1974.
- <sup>42</sup> Jón Jóhannesson, *Gerðir Landnámabókar*. Reykjavík 1941.
- <sup>43</sup> Magnús Finnbogason, Kristján Eldjárn & Jón Jóhannesson (rit.), *Sturlunga saga*. 2 vols. Reykjavík.
- <sup>44</sup> K. Hastrup, *Culture and History in Medieval Iceland. An Anthropological Analysis of Structure and Change*. Oxford 1985; Id., *Nature and Policy in Iceland 1400-1800. An Anthropological Analysis of History and Mentality*. Oxford 1990; Id., *A Place Apart. An Anthropological Analysis of the Icelandic World*. Oxford 1998.
- <sup>45</sup> ハストロップは多数の理論的著作も執筆しているが、アイスランドに関わる論文を集めたものとして、K. Hastrup, *Island of Anthropology. Studies in past and present Iceland*. Odense 1990. また、彼女は北歐世界全体の構造的理解の試みである以下の共同研究の統括者でもある。菅原邦城他訳『北歐社会の基層と構造』3巻(東海大学出版会 1996 原著 1992)。
- <sup>46</sup> J. Byock, *Feud in the Icelandic Saga*. Berkley 1982 (柴田忠作訳『アイスランド・サガ 血讐の記号論』東海大学出版会 1997)。
- <sup>47</sup> J. Byock, *Medieval Iceland. Society, Sagas, and Power*. Berkley 1988 (柴田忠作・井上智之訳『サガの社会史 中世アイスランドの自由国家』(東海大学出版会 1991)。
- <sup>48</sup> J. Byock, *Viking Age Iceland*. Harmondsworth 2001.
- <sup>49</sup> W. I. Miller, *Bloodtaking and Peacemaking. Feud, Law, and Society in Saga Iceland*. Chicago 1990. なお、本書の公刊以降、ミラーは狭い意味での中世アイスランドというフィールドを離れ、歴史世界における価値や感情に関する一連の著作を執筆している。W. I. Miller, *Eye For An Eye*. Cambridge 2005; Id., *Faking It*. Cambridge 2003; Id., *The Mystery of Courage*. Cambridge, Mass. 2000; Id., *The Anatomy of Disgust*. Cambridge, Mass. 1997.
- <sup>50</sup> 中世における紛争解決研究は枚挙にいとまないが、その動向と論点を整理したのものとして、服部良久「中世ヨーロッパにおける紛争と秩序 紛争解決と国家・社会」『史林』88-1 (2005), 56-89頁; 同「中世ヨーロッパにおける紛争と紛争

- 解決：儀礼・コミュニケーション・国制」『史学雑誌』113-3 (2004), 330-52 頁; 欧米の主要な研究論文を翻訳しているのは、服部良久編訳『紛争のなかのヨーロッパ中世』(京都大学学術出版会 2006)。
- <sup>51</sup> しかしながら、英米圏の文化人類学的研究と平行して、旧ソヴィエト連邦においても、きわめて興味深い中世アイスランド研究が現れていたことは特筆してよい。開拓者はレニングラド大学に旧ソヴィエト連邦で唯一の北欧学科を創設したステプリン=カメンスキイである。邦訳された作品に、ステプリン=カメンスキイ(菅原邦城・坂内徳明訳)『神話学入門』(東海大学出版会 1980)と、ステプリン=カメンスキイ(菅原邦城訳)『サガのこころ 中世北欧の世界へ』(平凡社 1990)がある。なお、このカメンスキイの影響の下に、独特の中世社会論を築き上げたのがアーロン・グレーヴィチである。とりわけ、彼の中世論の一つの結晶である、アーロン・グレーヴィチ(川端香男里・栗原成郎訳)『中世文化のカテゴリー』(岩波書店 1992)と、A・グレーヴィッチ「初期中世のスカンディナヴィア人たちのもにおける富と贈与」福富正実編訳『初期封建制度論叢』(大月書店 1982), 236-64 頁、を参照。カメンスキイもグレーヴィチも多分に記号論の影響を受けている点は強調されてもよい。彼ら以前のロシアにおけるサガ研究の歩みに関して、T. Jackson, *Russian history, Icelandic sagas and Russian historiography of the eighteenth to early twentieth centuries*, in: K. Zilmer (ed.), *Dialogues with Tradition. Studying the Nordic Saga Heritage*. Tartu 2005, p. 15-44.
- <sup>52</sup> Jón Viðar Sigurðsson, *Chieftains and Power in the Icelandic Commonwealth*. Odense 1999; Id., *The Icelandic aristocracy after the fall of the Free State*, *Scandinavian Journal of History* 20 (1995), p. 153-66.
- <sup>53</sup> C. Callow, *Reconstruction the past in medieval Iceland*, *Early Medieval Europe* 14-3 (2006), p. 297-324.
- <sup>54</sup> 彼の死後、中世後期に関わる論考を集めたものとして、Jón Jóhannesson, *Íslendinga saga II. Fyrirlestrar og ritgerðir um tímabilið 1262-1550*. Reykjavík 1958.
- <sup>55</sup> Sigurður Línal, *Saga Íslands* III, Reykjavík 1978; IV 1989; V 1990.
- <sup>56</sup> K. Helle, *The position of the Faeroes and other 'tributary lands' in the Medieval Norwegian dominion*, in: A. Mortensen & S. V. Arge (eds.), *Viking and Norse in the North Atlantic*. Tórshavn 2005, p. 11-21; S. Imsen, *Earldom and kingdom. Orkney in the realm of Norway 1195-1379*, *Historisk tidsskrift* (N) 79 (2000), s. 163-80.
- <sup>57</sup> Jón Viðar Sigurðsson, *Island og Nidaros*, in: S. Imsen (red.), *Ecclesia Nidrosiensis 1153-1537. Søkelys på Nidaroskirkens og Nidarosprovinsens historie*. Trondheim 2003, s. 121-40.
- <sup>58</sup> P. P. Boulhosa, *Icelanders and the Kings of Norway: Mediaeval Sagas and Legal Texts* (The Northern World 17). Leiden 2005.
- <sup>59</sup> R. B. Wærdahl, *Norges konges rike og hans skattland: Kongemakt og statsutvikling i norrøne verden i middelalderen*. Trondheim 2006.
- <sup>60</sup> ノルウェーとアイスランドの関係という視点から、とりわけ「自由国」時代の動勢を整理した近年の概観として、Jón Viðar Sigurðsson, B. Gjerland & G. Losnegård, *Ingólfr. Norsk-islandsk hopehav 870-1536*. Frøde 2005.
- <sup>61</sup> たとえば詩エッダに関しては、B. Fjerdstøl, *The Dating of Eddic Poetry. An Historical Survey and Methodological Investigation*. København 1999; アイスランド・サガに関しては、T. M. Andersson, *The Problem of Icelandic Saga Origins. A Historical Survey*. New Haven 1964.
- <sup>62</sup> 極めて充実したホームページは、(<http://skaldic.arts.usyd.edu.au/db.php>)。
- <sup>63</sup> Guðrún Nordal, *Tools of Literacy. The Role of Skaldic Verse in Icelandic Textual Culture of the Twelfth and Thirteenth Centuries*. Toronto 2001.
- <sup>64</sup> M. Townend, *Knútr and the Cult of St Óláfr: Poetry and Patronage in Eleventh-Century Norway and England*, *Viking and Medieval Scandinavia* 1 (2005), p. 251-79; Id., *Whatever Happened to York Viking Poetry? Memory, Tradition and the Transmission of Skaldic Verse*, *Saga-Book of the Viking Society* 27 (2003), p. 48-90; Id., *Contextualizing the Knútsdrápur: Skaldic Praise-Poetry at the Court of Cnut*, *Anglo-Saxon England* 30 (2001), p. 145-79.
- <sup>65</sup> 文学史家のラーシュ・レンルーストは、比較的早い時期からコンテクストの重要性を理解してきた希有な研究者であり、彼による「ニヤールのサガ」の研究は、比較的古いとはいえ、ここで言及しておくに値する。L. Lönnroth, *Njáls Saga. A Critical Introduction*. Berkley 1976.
- <sup>66</sup> T. M. Andersson, *Five saga books for a new century*, *Journal of English and Germanic Philology* 103 (2004), p. 505-27.
- <sup>67</sup> T. M. Andersson, *The Growth of the Medieval Icelandic Sagas (1180-1280)*. Ithaca 2006.
- <sup>68</sup> E. A. Rowe, *The Development of Flateyjarbók, Iceland and the Norwegian Dynastic Crisis of 1389*. Odense 2005.
- <sup>69</sup> Gunnar Karlsson, *Goðamening. Staða og áhrif goðorðsmanna í Þjóðveldi Íslendinga*. Reykjavík 2004.

- <sup>70</sup> Gunnar Karlsson, Kristján Sveinsson & Mördur Árnason (rit.), *Grágás. Lagasafn íslenska þjóðveldisins*. Reykjavík 2001; Haraldur Bernharðsson, Magnús Lyndal Magnússon & Már Jónsson (rit.), *Járnsíða og Kristinréttur Árna Þorlákssonar*. Reykjavík 2005; Már Jónsson (rit.), *Jónsbók: Lögbók Íslendinga hver samþykkt var á alþingi árið 1281 og endurnýjuð um miðja 14. öld en fyrst prentuð árið 1578*. Reykjavík 2004.
- <sup>71</sup> もちろん, 19世紀以来アイスランドにおける古遺物への関心はあったが, 科学的な調査が進展するのは1907年に国立博物館に研究科長 (director) の職が設置されてからである. 初代科長はマティアス・ソールザルソン (1877-1961) であり, 2代科長が, のち第3代アイスランド共和国大統領となったクリスティアン・エルドヤーン (1916-82) である. 初期アイスランド考古学の歴史に関して, Adolf Friðriksson, *Sagas and Popular Antiquarianism in Icelandic Archaeology*. Aldershot 1994, p. 1-16.
- <sup>72</sup> Orri Vésteinsson, *The Christianization of Iceland: Priests, Power, and Social Change 1000-1300*. Oxford 2000.
- <sup>73</sup> Orri Vésteinsson, Patterns of settlement in Iceland: a study in prehistory, *Saga-Book of the Viking Society* 25 (1998), p. 1-29.
- <sup>74</sup> Orri Vésteinsson, T. H. McGovern, & C. Keller, Enduring impacts: social and environmental aspects of Viking Age settlement in Iceland and Greenland, *Archaeologia Islandica* 2 (2002), p. 98-136; T. H. McGovern et al., Landscapes of settlement in Northern Iceland: historical ecology of human impact & climate fluctuation on the millennial scale, *American Anthropologist* 109 (2007), p. 27-51.
- <sup>75</sup> Birna Lárusdóttir, Settlement organization and farm abandonment: the curious landscape of Reykjahverfi, North-East Iceland, in: W. Davies, G. Halsall & A. Reynolds (eds.), *People and Space in the Middle Ages, 300-1300* (Studies in the Early Middle Ages 15). Turnhout 2006, p. 45-63; C. Callow, Geography, communities and socio-political organization in Medieval Northern Iceland, in: W. Davies, G. Halsall & A. Reynolds (eds.), *op.cit.*, p. 65-86; Orri Vésteinsson, Communities of dispersed settlements: social organization at the ground level in tenth-to thirteenth century Iceland, in: W. Davies, G. Halsall & A. Reynolds (eds.), *op.cit.*, p. 87-113.
- <sup>76</sup> 定住史研究にはいくつかの流路がある. フランス, ドイツ, イギリスでは, それぞれの国における歴史学と地理学の歩みが異なるために, アプローチ方法にズレがある. 伝統的なフランス流定住史研究の事例として, マルク・ブロック (河野健二他訳) 『フランス農村史の基本性格』 (創文社 1959); シャルル・イグネ (宮島直機訳) 『ドイツ植民と東方世界の形成』 (彩流社 1997); 近年のフランスの研究動向をまとめたものとして, 加藤玄「都市」と「農村」のはざままで 中世南フランス都市史研究の一動向『年報都市史研究』14 (2006), 132-46頁.
- <sup>77</sup> S. Perdikaris & T. H. McGovern, Cod fish, walrus, and chieftains: economic intensification in the Norse N Atlantic, in: T. Thurston & C. Fisher (eds.), *Seeking a Richer Harvest. The Archaeology of Subsistence Intensification, Innovation, and Change*. New York 2007, p. 193-206.
- <sup>78</sup> A. Helgason et al., Estimating Scandinavian and Gaelic ancestry in the male settlers of Iceland, *American Journal of Human Genetics* 67 (2000), p. 697-717; A. Helgason et al., mtDNA and the islands of the North Atlantic: estimating the proportions of Norse and Gaelic ancestry, *American Journal of Human Genetics* 68 (2001), p. 723-37.
- <sup>79</sup> Gísli Sigurðsson, *Gaelic Influence in Iceland: Historical and Literary Contacts: A Survey of Research*. Reykjavík 1986 (2000).
- <sup>80</sup> この分野の研究に関して, 基本的な論文集を挙げておきたい. A. Wawn (ed.), *Northern Antiquity: The post-Medieval Reception of Edda and Saga*. Enfield Rock 1994.
- <sup>81</sup> 包括的な研究として, L. D. Reynolds & N. G. Wilson, *Scribes and Scholars. A Guide to the Transmission of Greek and Latin Literature*. 3 ed. Oxford 1991 (L・D・レイノルズ&N・G・ウィルソン (西村賀子・吉武純夫訳) 『古典の継承者たちギリシア・ラテン語テキストの伝承にみる文化史』国文社 1996).
- <sup>82</sup> Már Jónsson, *Árni Magnússon: Ævisaga*. Reykjavík 1998.
- <sup>83</sup> Sigrún Davíðsdóttir, *Håndskriftsagens Saga - i politisk belysning*. Odense 1999.
- <sup>84</sup> J. Zernack, *Geschichten aus Thule: Íslendingasögur in Übersetzungen deutscher Germanisten* (Berliner Beiträge zur Skandinavistik 3). Berlin 1994.
- <sup>85</sup> A. Walette, *Sagens svenskar. Synen på vikingatiden och de isländska sagorna under 300 år*. Malmö 2004.
- <sup>86</sup> J. Kennedy, *Translating the Sagas. Two Hundred Years of Challenge and Response* (Making the Middle Ages 5). Turnhout 2007.
- <sup>87</sup> Jón Karl Helgason, *The Rewriting of Njáls Saga: Translation, Politics and Icelandic Sagas*. Toronto 1999.



- <sup>88</sup> 英語圏でこの分野を牽引するマーガレット・クリューニズ・ロスとアンドリュウ・ウォーンの研究を挙げるにとどめる。M. Clunies Ross, *The Norse Muse in Britain 1750-1820*. Trieste 1998; A. Wawn, *The Vikings and the Victorians. Inventing the Old North in Nineteenth-Century Britain*. Cambridge 2000.
- <sup>89</sup> Gunnar Karlsson, The emergence of nationalism in Iceland, in: S. Tägil (ed.), *Ethnicity and Nation Building in the Nordic World*. London 1995, p. 33-62.
- <sup>90</sup> J. L. Byock, Modern nationalism and the medieval sagas, in: A. Wawn (ed.), *Northern Antiquity: The post-Medieval Reception of Edda and Saga*. Enfield Rock 1994, p. 163-87.
- <sup>91</sup> K. Bödl, *Der Mythos der Edda: nordische Mythologie zwischen europäischer Aufklärung und nationaler Romantik*. Tübingen 2000.
- <sup>92</sup> Árni Björnsson, *Wagner and the Volsungs: Icelandic Sources of Der Ring des Nibelungen*. London 2003; Úlfar Bragason (ed), *Wagner's Ring and its Icelandic Sources*. Reykjavík 1995.
- <sup>93</sup> G. L. Mosse, *The Crisis of German Ideology. Intellectual Origins of the Third Reich*. New York 1981 (ジョージ・モッセ (植村和秀他訳) 『フェルキッシュ革命 ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』 柏書房 1998).
- <sup>94</sup> 代表的なものとして, K. v. See, *Barbar, Germane, Arier. Die Suche nach der Identität der Deutschen*. Heidelberg 1994.
- <sup>95</sup> 深澤英隆『啓蒙と霊性 近代宗教言説の生成と変容』(岩波書店 2006)。とりわけ第3部第1章から第3章まで。また, 宗教社会学の観点から現代におけるゲルマン宗教運動を扱った次の研究書も, 興味深い。S. v. Schnurbein, *Religion als Kulturkritik. Neugermanische Heidentum im 20. Jahrhundert*. Heidelberg 1992 (S・シュヌーアバイン (池田昭他訳) 『現代社会のカルト運動 ネオゲルマン異教』 恒星社厚生閣 2001)。
- <sup>96</sup> Gunnar Karlsson, *Iceland's 1100 Years. History of a Marginal Society*. Reykjavík 2000. 本書は, タイトルを変えたヴァージョンもある。Gunnar Karlsson, *The History of Iceland*. Minneapolis 2000.
- <sup>97</sup> たとえば, Gunnar Karlsson & Helgi Skúli Kjartansson, *Plágurnar miklu á Íslandi, Saga 32* (1994), s. 11-74.
- <sup>98</sup> カールソンによる短い通史は邦訳されている。グンナー・カールソン (岡沢憲英監訳・小森宏美訳) 『アイスランド小史』(早稲田大学出版部 2002)。
- <sup>99</sup> 谷口幸男『『北欧鬼神誌』について』『大阪学院大学国際学論集』4-2 (1993), 143-62 頁。
- <sup>100</sup> 松村武雄『北欧神話と伝説』(大洋社 1933)。なお, 本稿では取り上げないが, デュメジル, ストレム, オルリックといった基本書の翻訳の他, 日本人研究者による北欧神話のモノグラフもある。尾崎和彦『北欧神話・宇宙論の基礎構造 『巫女の予言』の秘文を解く』(白鳳社 1994); 水野知昭『生と死の北欧神話』(松柏社 2002)。
- <sup>101</sup> 研究成果をまとめたものとして, 松下正雄『スカンジナビヤ伝承文学の研究』(創文社 1965)。
- <sup>102</sup> 山室静『アイスランド 歴史と文学』(紀伊國屋書店 1963)。同じく『近代文学』同人であった荒正人は『ヴァイキング 世界史を変えた海の戦士』(中央公論社 1968)を執筆している。山室と荒と言う二人の文学者の北欧への眼差しは, 両書とも長らく巷間の北欧中世像を規定していただけに, 日本の北欧受容を考える際には極めて興味深い分析対象となる。
- <sup>103</sup> 山室静『赤毛のエリク記 古代北欧サガ集』(冬樹社 1974)。
- <sup>104</sup> 谷口幸男訳『エッダ 古代北欧歌謡集』(新潮社 1979)。なお, 本書は「詩エッダ」に, 「散文エッダ」の「ギュルヴィルたぶらかし」を合わせたものであり, 残りの「散文エッダ」は, 「スノリ『エッダ』『詩語法』訳注』『広島大学文学部紀要』43 特掲号 3 (1983); 「資料 スノリ・ストゥールソン『エッダ』「序文」と「ハッタタル (韻律一覧) 訳注 (1) (2) (3 完)」』『大阪学院大学国際学論集』25 (2002), 203-30 頁; 26 (2002), 125-54 頁; 27 (2003), 99-130 頁; 同訳『アイスランドサガ』(新潮社 1979)。
- <sup>105</sup> 学会のホームページは, (<http://homepage2.nifty.com/JINN/SISJ/index.htm>)。
- <sup>106</sup> 日本におけるアイスランドに関する研究論文の大部分は, 日本アイスランド学会が編纂した『日本アイスランド学会公刊論集』全 15 巻 (1981-98) に再録されている。
- <sup>107</sup> シーグルズル・ノルダル (菅原邦城訳) 『巫女の予言 エッダ詩校訂本』(東海大学出版会 1993); 菅原邦城訳・解説『ゲルマン北欧の英雄伝説 ヴォルスンガ・サガ』(東海大学出版会 1979)。
- <sup>108</sup> 堀米庸三「ゲルマン的文化の再発見」『中央公論』1966 年 12 月号 (「ヨーロッパ文化の底にあるもの ゲルマン文化について」として堀米庸三『歴史の意味』(中央公論社 1970), 56-72 頁に再録)。
- <sup>109</sup> 熊野聰『共同体と国家の歴史理論』(青木書店 1976)。
- <sup>110</sup> 熊野聰『北欧初期社会の研究 ゲルマン的共同体と国家』(未来社 1986)。
- <sup>111</sup> 熊野聰『北の農民ヴァイキング 実力と友情の社会』(平凡社 1983)。

- <sup>112</sup> 論文集である『サガから歴史へ 社会形成とその物語』（東海大学出版会 1994）は、『北欧初期社会の研究』以降に発表されたアイスランドに関する研究であるが、社会関係に注目するという点において従来の研究と一貫性を保ちつつも、理論面において人類学へ傾斜している。小著ながら『ヴァイキングの経済学 略奪・贈与・交易』（山川出版社 2003）は、それがいわゆる「ヴァイキング時代」の実態を反映したものかどうかという点に疑問は残るものの、贈与をキーワードにスカンディナヴィア社会の一面を再現している。内容に踏み込んだ書評として、小澤実『史学雑誌』113-12（2004）、122-23頁。なお、熊野とは方向が異なるが、やはりマイクロヒストリーの趣をもった社会史的研究として、次の文献を挙げておきたい。阪西紀子「斧を手にして法廷へ：戦いか訴訟か—中世アイスランドの紛争解決手段」『歴史学研究』717（1998）、35-46頁。